

<書評>

Sharon Hutchinson 著

Nuer Dilemmas : Coping with Money, War and the State. Berkeley, University of California Press, 1996 年, xviii+408 頁, 40.00UK ポンド

橋本 栄莉*

シャロン・ハッチンソン著『ヌエルのジレンマ』が出版されて 14 年余りが経とうとしている。刊行当時、本書はエヴァンズ＝プリチャードの優れた民族誌を補完する書籍として高く評価された。エヴァンズ＝プリチャード以降、さらには本書の刊行以降も多くのヌエル社会についての研究がなされてきたが、その中でも本書の存在感は群を抜いている。本書が注目した「グローバル化」や「世界システムの浸透」という歴史的な文脈は、刊行当時としてはまだ新しかったが、今やそれは民族誌を書く際に当然考慮されるべき文脈となった。その一方で、こうしたマクロな文脈の取り扱い方についてはさまざまな論考が注意を促してきた[e.g. 阿部・小田・近藤(編) 2007; 石井 2007]。しかし本書は、そうした警告を経てもなお、魅力的な視座を読者に提供し続けてくれる。ここでは、刊行当時の評価の対象となった「グローバル」な「歴史」的視点を取り入れるというアプローチについて再検討し、既存の書評の評者らとは異なる形で本書を再評価するとともに、本書がいまだに有する可能性について述べてゆく。

著者は、1980 年から 1983 年にかけて合計 24 ヶ月間行ったフィールドワークをもとに本書を執筆した。本書の目的は、「エヴァンズ＝プリチャードが調査して以後の 60 年間²で、ヌエルの男女が動乱の歴史の経験をどのように理解してきたか、またその経験を彼らの文化や社会生活にどのように融合させてきたかを描くこと」[p.27]である。以下では、著者の注目した「グローバル」な変化とヌエルの観念とが絡み合う場に焦点をあてて本書の内容を整理したい。

本書の構成と内容は以下の通りである。

プロローグ

* 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

1 例えば、アフリカの「近代」をグローバル化システムと各地の諸文化が弁証法的に交渉する過程であるとし、複数のモダニティのありようを指摘したコマロフ夫妻[Comaroff and Comaroff 1993]に対して、宗教儀礼や呪術を資本主義や国家システムのもたらす影響として単純に接合したことに対する批判が多く寄せられている。

2 本書には 60 年間とあるが、エヴァンズ＝プリチャードが調査を行っていたのは 1930 年代であるため、およそ 50 年間とするのが妥当であると考えられる。

第一章 導入

第二章 血、ウシ、カネ：ヌエルの価値の商品化

第三章 銃、戦争、国家：権力、暴力、リーダーシップの新しいコンテクスト

第四章 「血よりはウシ」：変化するジェンダー、結婚、親子関係のシンボリズム

第五章 「インセストは血と牝牛である」：再生産の統制のための闘争

第六章 「ブル・ボーイズ」の出現：政治的リーダーシップ、正当性、男子のイニシエーション

第七章 「ウシが無駄に殺されることはない」：キリスト教、改宗、予言者のゆるぎない重要性

あとがき

本書は殺人やレイプ、難民生活といったヌエルの人々の衝撃的な内戦の証言から始まる。本書の構成は、まず第一章で先行研究の整理と問題提起を行い、残る第二章から第七章までそれぞれのトピックに基づいた民族誌的記述を行ってゆくものとなっている。

第一章において、著者はエヴァンズ＝プリチャードの民族誌を乗り越えようと彼の持ち得なかった以下のような視点を打ち出す。まず、文化的な「境界」や「同質性」、「秩序」といった固定的な構造モデルを超えて、対象社会を歴史的・動的な枠組みの中で捉えることである。そして植民地統治、内戦、大宗教の浸透といった強大な圧力と、その中で変化してゆく社会関係や文化的実践との関係を捉えること、さらには対象社会の人々が有する既存の概念や慣習が現れる実践の場において、彼らの議論の争点となっていることを追うことである[p.28]。これらの点を検討するにあたり、著者が注目した「グローバル」という概念が重要な役割を帯びてくる。著者は「グローバル」という語を、「2つの内戦に基づいた複雑な社会的・政治的要因に伴うウシや労働マーケットの拡大、政府の行政ネットワークの設立、読み書きと政府の学校制度の導入、キリスト教・イスラームの改革の力に関連したより広範囲の歴史的過程を示唆するもの」[p.29]と定義した上で、議論を始める。

第二章では、植民地統治の拡大に伴う地域的なウシと労働マーケットの拡大に注目し、日常の交換媒体であるウシとカネがどう置き換えられるのかという観点からヌエルの人々の議論を追っている。貨幣経済が導入されたころは、ヌエルの人々はウシと違って「血をもたない」カネに困惑していた[p.56]。しかし、現金の需要が高まるとともにウシの地位自体も見直されるようになり、ウシとカネをめぐる関係は半世紀をかけて次のように大きな変化を遂げたのだった[p.57; pp.72-73]。人々ははじめ、「ウシを得るためのカネ」をウシを売ることによって得ようとしていた。その価値は徐々に単に「カネによってウシを得ること」へ、そして「ウシによってカネを得ること」へとシフトしていったという[pp.72-73]。カネの流通とともに、購入の仕方によってウシはさまざまなカテゴリーに分

けられながら用いられていった³。その一方で、カネは供犠や婚姻といった「血を持つ」領域においては「効果的」ではなかったという [p.79]。この領域に関しては第四章で詳しく検討される。

第三章では、第一次・第二次スーダン内戦以降の銃の普及や政府の影響力の拡大によって、ヌエル社会内での殺人に関する霊的・社会的な影響が弱まったことが論じられ、さらに殺人や死に対する人々の解釈の変遷を取り上げている。銃の普及や政治的権威が政府の権力という世俗的なものにとって代わられるにつれ、人々の殺人に関する観念は急速な変化を遂げた。1980年代にしばしば行われていた槍を用いた隣接民族集団との戦闘における殺人では、殺人者はその殺人に対する社会的・霊的な責任を負い、ヌエール(*nueer*)というケガレを伴うものとされていた。これは殺害された者の流れ出る「血」のイメージに起因するものであるという。しかし、多くのヌエル男性が国家の軍隊や地方警察に参加するようになり、ヌエルの仲間を「職務上」殺すという可能性を受け入れざるをえなくなった。「政府(*kume*)」が関与する戦いのコンテキストにおいては、こうしたケガレは無視され、さらに銃の弾丸によって殺された者は Cholwitic (*col wic*) という稲妻の神性によってもたらされた死と同等のカテゴリーに入れられるようになり、内戦における多くの死者はこのカテゴリーに入れられた [p.140]。銃の重要性はその他の社会生活においても増し、「銃との交換で得たウシ」として婚資などに用いられるようになる [p.151]。こうした銃の流通や殺人観の変化は、ヌエルの「自己」や「社会性」という概念を揺るがし、変化させたと著者は主張する [p.156]。

第四章では、「血(*riem*)」、「ウシ(*yok*)」、「カネ(*yiou*)」という観念が、男女間や世代を超えてどのように経験され、価値付けられていったのかについて、結婚や離婚に際して政府側の首長法廷が下す判決や男女間関係の変化という側面から論じられる。ウシは社会的紐帯の構築に重要な役割を果たしているが、「血」や「食べ物(*mieth*)」——人間の生命力の根源——という概念も同様に重要であった [p.161]。「血がほしいからもっと食べる」 [p.164] という発言からもわかるように、「食べること」は「血」と関連付けられ、さらに「血」と「ウシ」という観念も不可分に結びついていた。著者はこの結びつきが男女間や世代間の権力関係を理解する際の鍵となる点と考え、ヌエル社会に通底する『血』の関係よりは『ウシ』の関係(Cattle over Blood) というイデオロギーの存在を指摘する [p.160]。ヌエル社会では「血の生産者」である女性よりも「血の操作者」である男性の方が勝っているとされ、女性が「弱く」、「自律的でない」というイメージは、このイデオロギーによっているという [p.196]。したがって、「血」というイディオムによって形成される母子関係などの人間関係よりも、「ウシ」というイディオムで形成される人間関係の方がより重視される傾

³ 人々は「仕事によって得るカネ」、ウシを売ることを通じて得た「ウシのカネ」、買ったウシである「カネのウシ」、婚資として得た「女のウシ」というようなハイブリッドなカテゴリーを用いていた [p.56]。

向にある。このイデオロギーは、貨幣経済の浸透に伴い再評価されるようになったウシの重要性によって新たな形で支持されることとなった。男女間や世代間の権力関係は、「血」や「食べ物」、あるいは「ウシ」といったものが様々に再概念化されることによって、再生産され続けている。

第五章では、1930年代から90年代にかけてのインセストの禁止や外婚制の規制のあり方をめぐるヌエルの人々による議論を追っている。「親族」や「インセスト」というカテゴリーは、共有された「ウシ」や「血」に基づいているとされてきたが、内戦を通じた政治同盟の拡大に伴って外婚の規則は簡略化され、その定義自体が疑われるようになり、ヌエルの若者たちはこれまでのインセストの意味やそれに伴うケガレ、そしてその定義の限界について「インセストの禁止は人間の血に根ざしているのだろうか？それともウシだろうか？」[p.249]と議論をするようになった。こうした疑問は次に述べるようにイニシエーションの領域にまで及ぶようになる。

第六章では、1940年代後半から増加した、イニシエーションを拒む「ブル・ボーイズ(Bull-boys)」と呼ばれる教育を受けたヌエルの若者の出現に注目する。ヌエルのイニシエーションでは、男児の額にライン状の癍痕(*gaar*)がナイフで刻まれる。これは基本的には「部族」間闘争におけるエスニック・アイデンティティを認識するためのものであったが、学校教育を受けた若者たちは、自分たちが「ヌエル人」である、という認識よりも、「南部スーダン人(*jinubni*)」、あるいはアフリカの「黒人(*nei ti caar*)」であるという認識を持つようになった[p.270]。年齢組の中での強力な「血」の紐帯を育てるというイニシエーションを受けてない男性は「男児」と「成人男性」の中間領域にあるため、ウシに関する集団的権利や社会的役割などに関する問題を引き起こすこととなる。ブル・ボーイズは、癍痕のある男性との社会的対等性を主張しなければならないというプレッシャーの下にいるのである[p.294]。その一方で、「紙(*waragak*)」——読み書きの隠された力——がヌエル社会において重要性を増していることも事実だった。「紙」は、拡大する国家権力や地域行政の力を象徴するものであり、自分たちがコントロールできる範囲を超えた「政治的」権力に対して、自分たちのもろさを感じさせるものであったという[p.271; p.283]。癍痕や「紙」、「ウシ」、あるいは「血」をめぐるヌエルの若者の立場や態度は交錯している。

第七章では、1980年代から90年代にかけてのキリスト教の布教に伴いウシの供犠の役割が低迷したことを示すと共に、キリスト教徒と非キリスト教徒とのつなぎ目としての役割を果たしたヌエルの予言者について述べている。度重なる内戦を経て、人生の危機や人間の不幸を解釈するにあたり、キリスト教の方がヌエルの「霊(*kuoth*)」よりも説得力を持つのではないかと人々の間で言われるようになった[p.345]。ウシの供犠を教義上好ましくないとしてきたキリスト教の布教によって、ウシの供犠を行う機会は減少することとなる。はじめ、キリスト教徒と非キリスト教徒の間には対立がみられたが、両者の教義を照らし合わせ、教会に出入りするなどして両者を和解に導いたのはヌエルの予言者であった。

そしてインセストのように供犠を通してしか「解決」できなかったような問題については、キリスト教徒であっても再び供犠を行うようになっていった。予言者の巧みな戦略によって、キリスト教と「伝統」宗教のはざままで生じていた人々のジレンマや不安は和らいでいったのだった。あとがきにおいて、ウシの価値の低下や銃の重要性の更なる高まりといった今後のヌエル社会の展望が述べられ、本書は閉じられる。

このように、第二章からの各章は、それぞれ貨幣経済の導入、銃の流通、ジェンダーの変化、インセストへの規制、イニシエーションの拒否、キリスト教の布教、という一見すると異なる領域における変化と「伝統」の持続の側面に焦点を当て、それぞれがヌエルの人々にどのように「理解」され、「経験」し直されていったかという軌跡を追っている。そしてそれぞれの事象は、その都度再概念化されていった「血」や「ウシ」といったイメージを介して分かちがたく関連し合っていることが示される。

ここでは、こうした著者の取り組みに対して当時寄せられた評価をまとめ、ヌエル研究史の中に本書を再定位するとともに、異なる視点からも本書の評価を試みたい。

刊行当時の評価の多くは、J.クリフォードとJ.マーカスらによって出版された『文化を書く』(1986)によって提示されたそれまでのエスノグラフィーのあり方に対する批判から抜け出すことに成功した作品として本書を評価した。つまり、静態的な社会のモデルから脱し、「歴史」的な視点を取り入れることを達成したというのである[e.g. Burton 1997; Woodward 1999]。1940年代以降、脈々と受け継がれてきた構造機能主義的とされるヌエル研究[e.g. エヴァンズ=プリチャード 1978(1940); Beidelman 1971]は、80年代にはアレンズ[Arens 1983]やロサルド[Rosaldo 1986]によって植民地状況といった「歴史」的側面を描いていないとして痛烈に批判された。確かにこのような背景の中で「グローバル」な視点を取り入れる著者の試みは斬新だったかもしれない。本書は、1990年代以降に海外難民の生活やキリスト教との接合といった「グローバル」なヌエルの現状に焦点をあてた数々の研究[e.g. Shandy 2007; Christiane 2008]にとって先駆的なものとなったといえよう⁴。

しかし、著者のアプローチはこれら後年のヌエル研究者らの試みとは多少毛色が異なっている。本書の魅力は、西欧文明との接触によるヌエル社会の変化の過程を追う点にあるのではない。本書の目的を思い出すとわかるように、著者が試みたのは、ヌエルの人々がマクロな文脈をどのように「融合」してきたのか、その「変化」について当該社会の人々

⁴ 例えばシャンディ[Shandy 2007]は、アメリカ合衆国に住まうヌエルの難民たちを対象に、いかにして彼らがアメリカ社会に適応してゆくのか、また内戦から平和期間へと移行する祖国をどう捉えるかということについて検討した。また、クリスチアーヌ[Christiane 2008]は、エチオピアにあるヌエルの難民キャンプの土着教会に関する運動を内戦の経験や西洋社会への憧れから生じたものと捉える一方、西洋のキリスト教のヘゲモニーに戦略的に抵抗するものでもありと分析した。

がどのように選択的に議論をしてきたのかを追うことであった。言い換えると、本書はむしろ、日常生活におけるヌエルの人々との対話を中心に、著者があらかじめ定義しておいた「グローバル」な文脈が変更を迫られ、ジレンマを抱えながらもそうした文脈を「ウシ」や「血」といった生きたイメージの連関を通じて再び紡ぎ直してゆくという様相を微視的に追ったものである。著者ははじめ、「グローバル」という概念をマーケットの拡大や行政システムの介入、大宗教の布教などを含むものであるとしたが、著者と彼らとの対話から導き出されるのは、むしろ、「西洋」と「非西洋」との単純な接合を拒むヌエルの人々の敏感な姿である。著者はこの点に注目することによって、安易な文脈化、すなわち外的な状況の変化に応じたものとして当該社会の変化を捉えることを避けることが出来たといえる。

しかし、本書にも問題がないわけではない。著者の「グローバル」の定義から出発して本書を読むと、どうやら「グローバル」という枠組み自体、疑わざるをえないようになってくる。本書の細やかな描写は、皮肉にも著者がはじめに提起しておいた「グローバル」という定義を瓦解しうるものなのである。ここに、ヌエルの人々をどうにか「グローバル」という枠組みで捉えようとした著者の欲望と苦しみを見出すことができる。

石川は、『グローバリゼーション』の概念規定の多様性は、私たちの歴史認識に深く関わるものであるとし、「グローバリゼーションを歴史的に考えること」が必要であるとす[石川 2004: 413-414]。すなわち、「グローバリゼーション」としてある事象を規定し、理解しようとすることは、当該社会の「歴史」の中に私たちの「歴史」を見い出そうとしてしまうことであるといえる。著者が妥当であるとした「グローバル」の概念規定には、自らの「歴史」を基軸としながら、他社会の変化を捉えようとする試みを垣間見ることができる。しかし、著者は「グローバル」ということによって事象を説明したいという欲望に駆られながらも、その限界や怪しさに常に自覚的であった。

本書の第七章の最後に述べられている、ヌエルの予言者の唄に関する考察が「グローバル」という枠組みに対する著者のためらいを物語る。予言者の唄は南部スーダンの独立を希望するものとして人々に唄われているものとして提示され、これは内戦・平和構築以降の「ヌエルと南部スーダン人の集合的なインスピレーションを喚起するものである」と指摘する[p.348]。確かに、このように国家レベルの問題を考えるようになったヌエルの人々の姿は「新しく」、「近代的」にみえる。しかし、その一方で著者は「多くのヌエルの仲間、わたしが『聴こう』とした唄の解釈の誤解や不正確さについて謝らなければならない」とも述べている[p.348]。著者がこの唄から『聴こう』としたのは、「グローバル」なヌエルの人々の姿である。しかし、この著者の謝罪は、著者による唄の解釈とヌエルの解釈との間には食い違いがあるという可能性を示唆している。歴史学者 D.ジョンソンによる

一連の研究[e.g. Johnson 1994; Johnson (in press)]からもわかるように⁵、この唄は今や多くの解釈を生み、当該社会の人々が抱えた複数の「歴史」的時間性を含みうるものである。著者が述べた通り、この唄にあるようなヌエルの「霊」は国家レベルの問題において解釈されることもあるが、時にヌエル社会内の問題、親族にまつわる問題、あるいは個人の問題としても語られうるのである。エヴァンズ＝プリチャードはさまざまな社会的な現象に対して「霊」を紹介した説明をするヌエルの人々の態度について、「畏怖」や「カタルシス」などの心理学的・宗教学的な概念によって「簡単に定義したり評価することはできない」[エヴァンズ＝プリチャード 1982(1956): 490-491]と述べた。エヴァンズ＝プリチャードと同じように、著者も調査者自身の持つ分析的な枠組みによってヌエルの人々の態度を記述することに非常に慎重であったといえる。さらには、近年のスーダンで「民主化」への期待が高まる一方で、「南部スーダンの独立」に対する人々の思いも揺れ動いている[c.f. Johnson (in press)]。調査者が「聴こう」とする当該社会の「歴史」の様態はますます複雑化し、均質化された「グローバル」な「歴史」の一部としてヌエルの人々を捉えることはもはやできない。著者が導入部で述べているように、「ヌエルの人々は自分たちの経験した社会変化についての解釈を発展させ続けており、(本書で提示される) 解釈は彼らの未来への懸念や願望によって刷新されうる」[p.50、括弧内評者]のである。本書の刊行以後も著者はヌエルを追い続け、政府の権威と「霊」の力との絡み合い[Hutchinson 1998]や、内戦を通じた民族間関係の変遷とヌエルの女性たちとの結びつき[Hutchinson and Jok 2002]といった、ヌエル社会の「変化」とも「持続」ともつかないような状況を記述し続けている。

本書のタイトルにある「ジレンマ」には、ヌエルの人々のものだけでなく、対象社会を自身の「歴史」の視点から「グローバル」化したい欲望に駆られながらも、その試みが決してうまくはいかないという著者自身、そして私たちが抱えるジレンマが含まれるとは考えられないだろうか。もちろん、「グローバル」というのも「歴史」の一つの軸ではある。しかし、フィールドでは「グローバル」な時間も含めた固有の時間が交錯しながら展開しており⁶、「歴史」という概念そのものについての問い直しの必要性が迫られている。当該社会における「歴史」や「変化」⁷の普遍化しにくい側面や、固有の時間性の断面を示してくれる本書は、「歴史」・「時間」概念と人々の「経験」のありかたを再考しようとする人類学者にとって、読み直される価値があるといえるのではないだろうか。

⁵ 歴史学者のジョンソンは、ヌエルの予言者の歴史化に成功したと評されるが、その歴史の中に現れる「予言的時間」の存在を示唆している[Johnson 1994: ix]。

⁶ この点は、2009年1月に評者が短期現地調査をした際にも確認した。

⁷ 「変化すること(to change)」と英訳される *gæer ro* というヌエル語は、「～から分ける」、「～から離れる」というニュアンスを含むものである[p.39]。こうした翻訳のあり方からも、私たちがイメージする社会の「変化」ということと、人々が「経験」・「理解」する諸現象のあり方との間には微妙な捉え方のずれがあることが指摘できる。

参考文献

阿部 年晴・小田 亮・近藤 英俊（編）

2007 『呪術化するモダニティ』風響社。

Arens, William

1983 Evans-Pritchard and the Prophets: Comments on an Ethnographic Enigma. *American Anthropologist* 78 : 1-16.

Beidelman, T. O.

1971 Nuer Priests and Prophets: Charisma, Authority, and Power among the Nuer. In *The Translation of Culture: Essays to E. E. Evans-Pritchard*. T. O. Beidelman(ed.) , pp.375-415. London: Tavistock Publications.

Burton, John. W.

1997 Review of *Nuer Dilemmas: Coping with Money, War and the State*, by Sharon Hutchinson (1996). *Journal of the Royal Anthropological Institute* 3(4): 819-820.

Christiane, Falge

2008 Countering Rupture: Young Nuer in New Religious Movements. *Sociologus* 59(2) : 169-195.

Comaroff, J. and J. Comaroff

1993 Introduction. In *Modernity and its Malcontents: Ritual and Power in Postcolonial Africa*. Comaroff, J. and J. Comaroff (eds.), pp. xi-xxxvii. Chicago: University of Chicago Press.

エヴァンズ＝プリチャード, E, E.

1978 『ヌアー族：ナイル系一民族の生業形態と政治制度の調査記録』向井元子訳、岩波書店。(Evans=Pritchard, E, E. 1940 *The Nuer: A Description of the Modes of Livelihood and Political Institutions of a Nilotic People*. New York; Oxford: Oxford University Press.)

1982 『ヌアー族の宗教』向井元子訳、岩波書店。(Evans=Pritchard, E, E. 1956 *Nuer Religion*. New York: Oxford University Press.)

Hutchinson, Sharon

1998 Death, Memory and the Politics of Legitimation: Nuer Experiences of the Continuing Second Sudanese Civil War. In *Memory and the Postcolony: African Anthropology and the Critique of Power*. Richard Werbner(ed.) pp.58-70. New York : Zed Books.

Hutchinson, Sharon and Jok Madut Jok

- 2002 Gendered Violence and the Militarization of Ethnicity: A Case Study from South Sudan. In *Postcolonial Subjectivities in Africa*. Richard Werbner(ed.), pp.84-108. London: Zed Books.

石井 美保

- 2007 『精霊たちのフロンティア：ガーナ南部の開拓移民社会における〈超常現象〉の民族誌』世界思想社。

石川 登

- 2004 「歴史のなかのグローバリゼーション：ボルネオ北部の植民地期と現代にみる労働のかたち」『文化人類学』69(3): 412-436。

Johnson, Douglas H.

- 1994 *Nuer Prophets : A History of Prophecy from the Upper Nile in the Nineteenth and Twentieth Centuries*. Oxford: Oxford University Press.

(in press) The Return of Ngundeng's DANG. *Sudan Studies* 40.

Rosaldo, Renato

- 1986 From the Door of His Tent: The Fieldworker and the Inquisitor. In *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*. James Clifford and George E. Marcus (eds.), pp.77-97. Berkeley: University of California Press.

Shandy, Dianna. J.

- 2007 *Nuer-American Passages: Globalizing Sudanese Migration*. Gainesville: University Press of Florida.

Woodward, Peter

- 1999 Review of *Nuer Dilemmas: Coping with Money, War and the State*, by Sharon Hutchinson(1996) and *Nuer Prophets: A History of Prophecy from the Upper Nile in the Nineteenth and Twentieth Centuries*, by Douglas Johnson(1994). *Africa* 69(4) : 634.

(2010年4月21日採択決定)